

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 感情と自然 自然の内的経験について   |
| Author(s)    | 山形, 頼洋  |
| Citation     | 大阪大学, 1989, 博士論文  |
| Version Type |   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/36915">https://hdl.handle.net/11094/36915</a>   |
| rights       |   |
| Note         | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。 |

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【4】

|         |   |
|---------|---|
| 氏名・(本籍) | 山形頼洋  |
| 学位の種類   | 文学博士  |
| 学位記番号   | 第 8798 号                                    |
| 学位授与の日付 | 平成元年 7 月 19 日                               |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 5 条第 2 項該当                            |
| 学位論文題目  | 感情と自然<br>自然の内的経験について                        |
| 論文審査委員  | (主査)<br>教授 三輪 正<br>(副査)<br>教授 塚寄 智 教授 里見 軍之 |

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は感情および自然を人間の根源的な存在様態の問題として捉え、掘下げたもので、9章および結論によって構成されている。第1章から第5章までは、感情とは何かを主に問題にしており、第6章から第9章にかけては、自然についての我々の経験の性質を明らかにしようとしている。以下順を追って各章の内容を述べる。

第1章は「感情の志向性」と題され、感情とは何かの問題の出発点としてサルトルの『情動論素描』が取り上げられ、分析される。感情の中で、明白な身体的表出を伴うのが情動であるが、情動も何らかの目的意識に貫かれた行動であること、このことは一見極めて受動的に見える情動にも妥当すること、真の情動には信憑が伴うこと等が論じられる。

第2章は「情動の中の身体」と題され、情動における身体の役割、特に私の身体の役割がサルトルの『存在と無』を手引きとして論じられる。著者によれば、サルトルの場合身体は対自が自己を対自として実現するために自己の可能性に向かって世界へ出て行く時、出発点として超えて行かれるものに過ぎない。しかし身体が世界の中で行為の遂行者であるためには、身体は単なる出発点でなく、対自の超出の運動そのものに含まれるものであり、その意味で身体は意識の志向性にとってヒュレーであるにとどまらず、むしろ積極的に身体自身が志向的な性格を持っていなければならぬであろうと著者は論ずる。かような志向的な身体が情動や感情の担い手であり、欠如や無を意識し、欲望を持ち、そして情動を、また感情を持つというのである。

「身体と時間」と題された第3章では、メルロー・ポンティの『知覚の現象学』が主な手掛かりとされる。メルロー・ポンティがこの書で構想した身体は世界に対して志向性の関係にある身体であり、知

覚はこの志向性を通して初めて可能になること、しかもその知覚は時間による総合であり、身体は過去現在未来を作りつつ即ち時間を構成しつつ世界を知覚していること、この時間的総合は悟性的総合とは別個のものであること、等が論じられる。著者は更に『知覚の現象学』が身体と呼んでいるものは実は最後の意識として時間を構成する時間意識にほかならないこと、この時間意識は究極的なものとして自己構成的であること、この自己構成において時間意識は時間を構成しつつ、その構成された時間と自己触発 auto-affection によって一体化すること、しかし時間意識の自己構成の問題はメルロー・ポンティのこの時間の自己触発の理論によっては解決されないことを論じている。

第4章は「時間意識の自己構成」という表題を持ち、フッサールの『内部時間意識の現象学』やプラント、ヘルトらの著作を参照しつつ、時間意識を分析する。自己構成としての時間意識は、過去把握、現在印象、未来予持を包含する具体的統一体としての生ける現在において、原受容性としての甘受 Hinnahme として生起していること、それはもはや志向性によっても規定されることのない原受動的な受け取ることそのことであることが言われる。またプラントの初発的反省という考え方がメルロー・ポンティの言う時間の自己触発と同じであることも言われている。

第5章は「超越と内在」という表題の下に、原受動的な甘受の問題がアンの『顕現 manifestation の本質』を主要な手掛かりとして追求される。意識はその本性上対象への関係であり、この関係は隔たりを持つことによって形成されること、この隔たりを通して現象が顕現してくることを、著作はアんに従いつつ詳細に論じ、さらに時間の自己触発の問題に関連させて、感情とは、時間を構成することによって知覚作用を遂行している原初的自我としての身体の内在における自己開示にほかならないと規定している。感情は内在において自己自身を感じることとして自己についての感情であり、一方では無力さであるが他方では自己自身の純粋な享受でもあることを著者はアんに学びつつ論じている。

「時間から他我へ」と題された第6章では、自然の超越性ないし独立性について我々の経験がフッサール、トイニッセン、ヘルトらを参照しつつ、私が他人とともにある共同主観性から出発して論じられ、他人経験の際の私の身体の役割に関するフッサールの説と、この説にたいするトイニッセン、ヘルトの批判が時間を考慮に入れつつ検討される。

第7章は「他人から時間へ」と題されて、レヴィナスの『時間と他人』及び『志向性と感覚』を主な手掛かりとしつつ、他人の存在によって保証される未来という問題を中心に議論が展開される。未来は死によって象徴されるように未知のもの、本質的に他なるものとして私を襲ってくるが、その未来が私の現在と接合して私に時間が成立するのは、私にとって既に他人があり、その他人との経験に準拠して、他である未来と私の現在との結び付きが実現しているからだというのである。

第8章は「コーギトーと感覚的経験」と題され、デカルトが『省察』の第6部で展開する物の存在証明を、ゲルーらの研究を参照しつつ、綿密に検討している。考える主体が自己以外の物の存在を知り得るためにはコーギトーの経験に加えて、感覚的観念が私の意思にたいして持っている強制感ないしは抵抗感がなければならぬことを著者は問題にするのである。

第9章「コーギトーと生ける抵抗としての身体」では、感覚的観念の持つこの強制感ない抵抗感が私の経験を根源的に構成する感情としてコーギトーによる自我の感情と不可分であること、努力感はい自我

の感情と抵抗の感情とをその構成要素として持つこと等がメヌ・ド・ピランの『精神学基礎論』などに依拠しつつ論究される。

結論として著者は、時間化の作用によって自己自身を根源的受容性において受け取るところに私の存在があること、この根源的受容性における知覚対象の甘受によって自然が私に対して超越的に存在するものとなることを言う。

### 論文の審査結果の要旨

本論文はふつう乗り越えられるべきもの、コントロールされるべきものとのみ考えられて顧みられることの少ない感情を、そこに私の存在と自然の存在とが顕われ出る根源的な在り方として捉えようとしたもので、論述の過程でサルトル、メルロー・ポンティ、フッサール、ブラント、ヘルト、アンリ、レヴィナス、デカルト、メヌ・ド・ピランらの哲学が、あるいは対話の相手としてあるいは批判の対象として考察される。そこには著者のこれらの哲学に対する長年の研鑽にもとづく理解と洞察がよく現われている。また感情と自然に関連して、身体、時間、意識、他者、物の存在、抵抗感、努力感等の哲学的諸問題も取り上げられ、分析される。その分析結果はこれらの問題の解明にも大きく貢献するものであろう。その論述は時に、多岐に渉りすぎるとの印象を与えないではないが、しかし、人間の根源的な在り方としての感情と自然の意味あるいは本質を追求する姿勢が一貫して窺われ、この点が本論文のユニークな特色となっている。特に自己触発の問題を掘下げたのは本論文の功績と言えよう。

しかし本論文にも問題がないわけではない。第1章のサルトルからメルロー・ポンティ、フッサールらを経て第9章のメヌ・ド・ピランに至る移行の論理的必然性が必ずしも明確でないこともその一つであろう。また感情、情動、情感等の語が意味の違いが判明でないまま曖昧につかわれていることも、感情を主題とする本論文においては難点として指摘されるべきものであろう。更にサルトルに先立って気分や情態性を分析し、サルトルにも大きな影響を与えたハイデggerについて殆ど触れられていないことはやや奇異の感を免れない。少なくともブラントやヘルトラ以上のスペースを割くべきであった。また学位請求論文としてはやはり巻末に引用ないし参照した文献の一覧表をつけるべきであったであろう。しかしこれらの難点は本論文の優れた内容を必ずしも損なうものではない。

以上により、本論文を文学博士の学位請求論文として十分な価値を有するものと認定する。